

封印された

ローズヴェルト、チャーチルはどこまで知っていたか

ホロコースト

リチャード・ブライトマン 著

川上 洸 訳

石田 勇治 解説

情報戦の全容。

知られざる

第二次大戦の

日の目をみた

半世紀をへて

把握していた…。

殺戮を刻一刻

ユダヤ人大量

ナチスによる

無線を解読して、

ドイツ警察の暗号

イギリス諜報機関は

大月書店 / 定価(本体5600円+税)

目次

謝辞 vii

日本語版凡例 ix

序章

双方での証拠隠滅 3 治安警察の関与 4 西側政府はどこまで知っていたか 8 三つの問題を一挙に解明 10

1 前ぶれ

ヒトラーの本音 14 ナチスはなぜ支持されたか 18 ユダヤ人への暴力の開始 21 西側外交官の観察 22 「わが闘争」の翻訳・刊行 27

2 人種戦争の計画

ナチスと警察 30 ポーランド占領 34 ソ連侵攻作戦 37 軍との調整 39 SS・警察高級指導者 41 人種戦争のために 43

3 大隊に命令下る

「ユダヤ人を排除せよ」 46 第三二治安警察大隊 48 ヒムラーの訪問 50 心理的難関 53 非ドイツ人の警官 55

OFFICIAL SECRETS by Richard Breitman
Copyright © 1998 by Richard Breitman

Japanese translation published by arrangement with
Richard Breitman c/o The Spieler Agency through
The English Agency (Japan) Ltd.

4	民族浄化の報告	58
	ヒムラーの権限 58 通信手段の必要 59 暗号システム 62 集団射殺のむずかしさ 65 無線で報告 67 ハンガリー・ユダヤ人の処刑 68 秘密保持 71	
5	移管と輸送	74
	ドイツ世論 74 どこへ? 76 官僚機構の動員 78 ガス室の計画 81 東方での治安警察 84 移送されたユダヤ人を殺戮 86 ユダヤ人絶滅をどう説明するか 92	
6	および腰のイギリス	94
	イギリスの暗号解読作戦 94 チャーチルの対応 98 何がわかったか 102 ほかの情報源 106 BBCのドイツ向け放送 109 ナチスを免罪する理由 111 しまい込まれた情報 116	
7	一部解読されたアウシュヴィッツ	119
	解読情報 119 アウシュヴィッツ 121 ヨーロッパ最大の都市? 124 ポーランド亡命政府経由 126 入手可能だった大量殺戮の情報 131	
8	アメリカの対応	133
	ホロコースト第一波 133 アメリカ外交官たち 134 記者たちの回答 136 ブント・リポート 139 もうひとつの秘密報告 141 ローズヴェルト政権 143 殺戮情報の行方 146	
9	西側での突破口	149
	シュルテ情報 149 リーグナー・リポート 151 カルスキ到着 158 届きはじめて大量殺戮の情報 163 チャーチルとローズヴェルト 165	
10	情報公開への反応	169
	BBC放送 169 不正確な解釈 172 キャンペーンの効果 173 ドイツ市民の抵抗 175 反ユダヤ感情の利用 178 もみ消し工作 179 ナチス指導部の困惑 181 連合国宣言の波紋 183 報復爆撃 185 難民受け入れ問題 185 英米当局の困惑 188	
11	競合と協力	193
	難民問題 193 どんな約束もしない 196 高まる圧力 196 バミューダ会談 200 もうひとつの英米会談 204 諜報協力 206	
12	財務省の攻勢	210
	できたはずのこと 210 動きだした財務省 216 戦争難民委員会 220 ハンガリーの事態 221 アウシュヴィッツ空爆の要請 226	
13	戦犯裁判	232
	戦犯裁判をめぐる思惑 232 伏せられてきた解読資料 234 ブラックリスト 238 解読資料を欠いて 239 治安警察の高官 241	
結論		245

ユダヤ「人種」絶滅の構想	245	治安警察の役割	246	連合国の対応	247
できたはずの仕事	253				
エピソード	255				
膨大な資料	256	公開された資料	257	マスメディアに発表を	259
イスでの進展	261	アメリカに引き渡された理由	265	まだ非公開は続	
く	266				

解説	石田勇治	269
原注		6
索引		1

謝 辞

本格的な歴史研究はおしなべて困難なものだが、本書をまとめるにあたって乗りこえなければならなかった障害は、なみだいていものではなかった。なにがその障害をつくりだしたかといえば、それは犯罪的政策の隠蔽をはかったナチスの努力でもあり、イギリスとアメリカの諜報機関がその記録の一部を歴史研究のために公開するのをしぶったという事情でもあった。これらの問題の一部は、本書のエピソードで論じられる。ある程度一貫した論旨をなんとかまとめあげることができたとすれば、それはほかの方々の絶大なご援助によるところが大きい。

まさきはこの研究にとり組むようにすすめてくれたのはコンラト・クヴィートで、彼はそのための資料の入手法についても示唆をあたえてくれた。ジョン・P・フォックスはすすんで行動し、関連のイギリス諜報記録の一部を連合王国において公開させる決定的なきっかけをつくってくれた。これら二人の研究者はいずれも原稿の一部を読み、

訂正や改善を提案してくれた。お一人のご援助と友情に最大の感謝をささげる。

『わが闘争』のヒムラー所持本は、初期のナチス思想についての重要な証拠を追加してくれた。それを閲読させてくださった所有者に感謝する。ブレッチリー・パークで働いたアメリカ人の第一陣に加わっていたアーサー・レヴィンソンは、よろこんで当時の体験を話してくれた。

同僚や友人たちには、多忙なスケジュールのなか、この研究の大部分を読んでもらい、おかげで欠陥をただすことができた。それは、シュロモ・アロンソン、デボラー・コーエン、ジョージ・ケント、ウォルター・ラーカー、リチャード・S・レヴィ、アラン・リヒトマン、ユルゲン・マテウス、ミハエル・ノイフェルト、ベアテ・ルウム・フォン・オッペン、カトリン・ピールの諸氏である。ラリー・マクドナルドとジョン・テラーは、合衆国立公文書館での資料探索に助力してくれた。ルイス・アサートン博士はイギリス公文書館のコレクションについての情報を提供してくれた。デーヴィッド・バンカー、ウエンディ・ロワー、デーヴィッド・マーウエル、チャールズ・シドナー、ステイヴン・タイアスもまた、多くの有益な参考資料と文書を提供してくれた。